

## 神経障害性疼痛が疑われる患者の疼痛緩和に向けて 薬局薬剤師が果たすべき役割

東森 瑞季<sup>1)</sup>、東中 貴志<sup>1)</sup>、深町 朋史<sup>2)</sup>、石黒 貴子<sup>2)</sup>、前田 守<sup>3)</sup>、長谷川 佳孝<sup>3)</sup>、  
月岡 良太<sup>3)</sup>、森澤 あずさ<sup>3)</sup>、大石 美也<sup>3)</sup>

1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 青梅今寺店

2) 株式会社アインファーマシーズ

3) 株式会社アインホールディングス

【目的】神経障害性疼痛は慢性疼痛の要因の一つであり、患者の QOL 低下を引き起こすおそれがある。近年の医薬品の進歩により治療薬の選択の幅が広がっているが、NSAIDs が慢性投与されるケースも少なくない。そこで本研究では、薬局薬剤師の慢性疼痛患者への対応状況を調査し、神経障害性疼痛が疑われる患者の疼痛緩和に向けて薬局薬剤師が果たすべき役割を検討した。

【方法】2020 年 2 月 26 日～3 月 17 日の期間に、当社が東京都、神奈川県、埼玉県で運営する保険薬局のうち 106 店舗に在籍する薬剤師を対象に、社内イントラネットでのアンケートを実施した。主な調査項目は、「慢性疼痛患者への対応経験と相談内容」「疼痛程度等の聞き取り方法」「神経障害性疼痛が疑われる患者への介入経験とその内容」とした。本研究は、アイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0054)

【結果】225 名から有効回答が得られた。172 名(76.4%)が慢性疼痛患者への対応を経験し、そのうち 163 名(94.8%)は「疼痛の改善がないこと」について相談を受けていた。対応経験者の「疼痛程度等の聞き取り方法」は「痛みの有無(64.0%)」「具体的事例の聴取(53.5%)」の順に多く、「疼痛スケールによる評価」の実施経験は 6 名(3.5%)であった。また、神経障害性疼痛が疑われる患者への介入は 41 名(23.8%)が経験しており、最も多い介入方法は「受診勧奨(88.4%)」、介入理由は「NSAIDs の効果実感不足(62.8%)」であった。

【考察】本研究より、多くの薬局薬剤師が慢性疼痛患者から相談を受けているが、十分に介入できていない可能性が示唆された。また、介入方法のほとんどが「受診勧奨」であったが、「疼痛程度等の確認」が「痛みの有無」や「具体的事例の聴取」などの抽象的かつ患者主訴に基づく主観的評価に留まっており、「疼痛スケール」などによる客観的指標に基づく評価があまり実施されていないことが示された。薬局薬剤師の介入が処方変更に至り、疼痛改善に至った事例もあることから、薬局薬剤師が慢性

疼痛患者の QOL 改善に向けてさらに貢献するためには、医療機関との連携強化はもちろんのこと、客観的評価に基づくエビデンスのある情報提供に努めることも重要と考える。

(第 53 回日本薬剤師会学術大会(2020 年 10 月, 札幌)にて発表)